

教 頭 会 報

栃木県公立小中学校教頭会
 発行者 宇賀神 貴
 編集 広 報 部

— も く じ —

◎関ブロ栃木大会 ・大会を終えて 1 ・開会行事、記念講演 2・3 ・運営・係を担当して 4 ・各分科会に参加して 5	◎特色ある学校 6 ◎地区だより 7 ◎ひろば 8
---	---

大会を終えて

組 織 の 和 と 力

栃木大会実行委員会運営部長 小 林 智



11月11日(木)・12日(金)の2日間にわたり、栃木県総合文化センターを主な会場として、第51回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会栃木大会を、さわやかな秋空の下、盛大に開催することができました。

県内外から約1500名の参加者を迎え、「生きる力をはぐくむ 豊かな学校をめざして ～夢に向かい 生き生きと輝く子どもの育成～」をテーマに、第1日目の全体会では、倉沢大樹氏によるエレクトーン演奏やH.C.TOCHIGI日光アイスパックスシニアディレクターのセルジオ越後氏による記念講演が行われ、大きな感動と輝く子どもを育てるための多くの示唆を与えていただきました。また、第2日目の分科会では、深く研

究された提言発表を受け、グループ協議の中で参加者一人一人が意見を述べ合い、活発な議論が交わされる姿が見られました。大会を通し、多くの参加者からお褒めや感謝の言葉をいただくなど、好評を得ることができましたことは大変喜ばしいことです。

今回の栃木大会は、身の丈にあった大会開催を念頭に置き、会員の先生方による手作りの運営に努めましたが、スタッフ不足や駐車場不足、宿泊施設から遠い分科会会場や窮屈さを感じる分科会会場など、計画当初から問題が山積していました。しかしながら、多くの先生が率先して複数の役割を担当していただき、事前に会場に足を運び円滑な運営に向け細部まで確認を行っていただきました。さらには各係担当や地区ごとに何度も話し合いを行い心温まる準備をしていただいたことにより、問題を一つ一つ解決することができました。先生方の知恵と努力、そして何よりも地元で開催される大会を成功に導きたい、よりよい大会にしたいという熱い思いが、実り多い充実した大会につながったものと確信しております。

栃木大会を終え、地方都市での開催の在り方、参加者の把握の仕方など残された課題もありますが、副校長・教頭先生方の豊かな発想とそれをすぐに実行に移す行動力、相手を気遣うきめ細かな心配りなど数々のすばらしさに触れ、組織としての和と力の偉大さをこの大会を通して強く感じるすることができました。

予定されていたすべての行事が、滞りなく終了し、大きな成果を上げることができましたのも、目的意識をもち大会に積極的に参加していただいた先生方を始め、これまで労を惜しまず企画・運営に携わっていただいた役員や各係の担当者、事務局員、関係者の皆様のご協力・ご尽力のおかげと心から感謝申し上げます。

秋深まる宇都宮市で

真岡市立久下田小学校 小 林 律 子



会長あいさつ

イチョウの葉が目映いほどに色づいた栃木県総合文化センターに、関東甲信越地区各都県から1,000人を越す副校長・教頭先生方をお迎えして、第51回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会栃木大会を開催しました。初日はアトラクション、開会行事と記念講演、二日目には、8会場に分かれて14の分科会が行われました。

開会行事に先立ち、午後1時からはアトラクションとして、本県出身のエレクトーン奏者、倉沢大樹氏の演奏がありました。



倉沢大樹氏の演奏

連続ドラマ「ゲゲゲの女房」の主題歌としても使われていた「ありがとう」や「八木節」などを多彩なアレンジで聴かせていただき、感動に包まれました。

開会行事は、宇都宮市副市長 横松薫様、栃木県教育委員会教育次長 宇田貞夫様、宇都宮市教育委員会教育長 伊藤文雄様を始め各関係団体から多数のご来賓をお迎えして盛大に行うことができました。

また、開会行事後の記念講演には、日光アイスバックスシニアディレクターでサッカー解説者のセルジオ越後氏を講師に迎えて、本頁以降からの概要でもわかるように、楽しく有意義な講演をしていただきました。

記 念 講 演

「地域とスポーツのちから」

H. C. TOCHIGI 日光アイスバックスシニアディレクター

サッカー解説者 セルジオ 越後氏

皆さんこんにちは。控え室で開会式のセレモニーを見ており、関東甲信越は広い地域ですが、学校教育の重要性や子どもの育成への情熱が非常に伝わってきました。

私は教育は専門でないのですが、学校での教育は一部であり、学校と社会・家庭を総合的に足して初めて教育の可能性が生まれてくるのではないかと信じています。それぞれの立場だけでばらばらで教育しても、恐らくいい結果は出ないと思います。いきなり辛口だと思わないでくださいね。環境はすごく大切です。学校、家庭、社会という環境の中で人間が育っていく、これが基本ではないかと思えます。ただ、時代があつという間に変わっていくのに人間がついていけなくなるのです。ルールがあるからついていけなくなる。会社にも教育にもマニュアルがあります。マニュアルと時代、社会の変化発展が本当に一致しているかという、機能していないものがほとんどではないかと思えます。決してマニュアルは間違っていないのですが、社会がそれくらい変わってしまったということです。人間はいろいろな環境でいろいろな過ごし方をしています。一定した環境の中で人間は育っている。私はブラジルに生まれ育ちました。国の文化や教育は全然違います。忘れたら取られるから、ブラジルの子は忘れ物をしない。日本の子は、忘れても大丈夫だから忘れ物をする。人間は動物ですから、環境、体験、経験の中で覚えていくということです。社会の変化の中で、教育がだんだん危なくなってきました。それは学校だけの責任ではない。学校だけで解決しようとしても、社会が変化しているのだから結論は出ません。私の時代にはみんな地域で遊んだ。それが交流の場だった。一生忘れない体験や経験、大人になっても生々しく覚えているものが教育じゃないかと思えます。だから、子どもをいかに感動させるか、本物をいかに見せるかが教育なのです。

記念講演

過ごしている中に人が育つ、過ごしている中に習慣がつくられる。教育というのは、正しい習慣を教える、悪い習慣をなくしていくということではないかと思えます。ポルトガルに行って、一つすごいおみやげを持って帰りました。ポルトガル人に「挨拶をしない人は人間として認めない」「挨拶というのは、足を止めて会話することだよ」といわれた。顔を見てしばらく話をしていたら顔を覚えるだろうと。今、みんなが人のことを気にしない社会になって、地域コミュニティが崩れてきている。感情を育てるにはどうしたらいいかと聞かれたら、人と会えばいいじゃないかと答えます。人と会わなくなったら、感情が育たなくなった。思いやりも、話さなかったらなくなっていくでしょうね。だから我々はスポーツを通してお手伝いしなくてはいけない。ただ、まだ日本にはその習慣がないのです。栃木県のため、埼玉県のためという文化は日本には育っていない。でも、それが今一番大事なことです。人と人が会えなくなったら、スポーツを利用してさせていかなければならないのです。常に人間が人間を求め、助け合ってやっていくのが人間社会です。合理化とのバランスを崩さないために、そういう催しをもっとつくってふやしていかなかったらこれは解決しない。人と会う、人と触れ合う、喧嘩もする、喜ぶ、そういう時間をこれからふやしていかなければならない。機械だけに頼らない社会をどうつくっていくかが、これからの日本の一つの大きな課題ではないかと思えます。スポーツを通して地域を育てる。しかし日本人は、国は応援するけれども、地域を応援するということは余りない。そういう教育をされていない。自分のところをどうして誇りに思わないのでしょうか。住んでいるところが最高にいいところだとみんなが思わなかったら、地域活性化にならない。地域と地域が争えば国が活性化するんです。

これからいろいろ変えていかななくてはいけないという話を開会式の際に聞きましたが、全くそのとおりです。ただ、実行していくためにはそれを理解させ、習慣づけしていくために親や地域がそれを繰り返しやっていかなければならない。学校の授業だけで無理だったら、スポーツを見に来るとか違う人と出会うなど、憩いの場をふやし体験していくことによって、初めて学校現場にそのよさが返ってくるのではないか。その中だけで発想するのは非常に難しいと思えます。学校教育では、学校の門から出て家庭や社会の中でこれから何をふやしていけるかです。その中で我々は、スポーツの団体を持っているところといろいろなものをつくり、刺激し、地域のために、今までにない環境に対して立ち上がる必要があるのではないか。いい環境は、社会のいろいろなところとタイアップして助け合ってやっていくことで、教育とスポーツと地域が初めて一致してくる。教育の皆さんとスポーツの我々は人間のT P Pをつくりましょう。種目を越えた交流をしましょう。人と会う場を与えていく工夫をすれば、明日子どもが大人になったときに、また前の日本に戻ってくるのではないかと思えます。街に立ってちょっと会話をする余裕、人の顔を覚える余裕。少しずつゆとりをつくってやっていかなければいけないんじゃないか。

文部科学省からもマニュアルが来ているはずですが、ただ、来ていないものは我々が工夫してやっていかななくてはならない。マニュアルは悪くない。豆腐の味噌汁のようなものです。毎日食べると飽きます。たまに具を変えればいい。マニュアルは味噌で、具ではない。味噌も具もみんなマニュアルにしていないか。ぜひその確認をしてほしい。それが広がって行って、おもしろさに変わり、次に行きたくなる。それが子どもに伝わり、親に伝わり、地域に伝わっていく。教育というのは学校からすべて発信していかなければならない。人間づくりだから。だから小学校から始まるというのは一番いい。子どもから新しいものをつくっていくことです。皆さんは指導者であり、親でもあります。地域の親と全く同じ立場です。もう少し長期的に考えてほしい。せっかくいい味噌があるのだから、具を変えて飽きない味噌汁にする。助け合うのも、社内だけではなく、社外のみんなで。それが地域ではないかと思えます。

子どもたちにも今までにない体験をさせる。今やっていることを新鮮に続けるために、新しいおかず、新しい味噌汁をつくってあげることが、長く効いて、教育する方もされる方も最後まで飽かないでできるコツだと思います。

人と会うということは、友達ができる可能性があるということです。皆さん、ぜひ友達をふやしてください。もう1人つくってみませんか。みんなですべてをやって、いろんなことに結びついて、地域やいろいろなものが初めて完成するのではないかと思えます。社会はもっと変わってきます。気をつけましょう。

きょうは長い間本当にありがとうございました。



〈開会行事 司会進行〉 ようこそ宇都宮市へ

宇都宮市立清原北小学校 飯山 百合子



関東甲信越の各地区から集まってくださったたくさんの先生方への感謝の気持ちと、本日を迎えるまでに栃木県の先生方がどれほど心を砕き、力を合わせて尽力してきたかを伝えたくて、私は粛々と全体会の司会進行の役を務めさせていただきました。

振り返ってみれば、昨年の夏、北海道で行われた全国大会に参加したとき、関プロ栃木大会を開催するのだなあと漠然と考えていただけの私ですが、大会実行委員会の一員となってから、私の意識は大きく変わりました。

綿密に練られた大会推進計画は、多方面細部にわたり実に緻密で、「人と物と金と情報」を動かす役員会や実行委員会の業務は、まさに組織マネジメントの実践そのものです。打合わせや会議を重ねるたびに、新しい問題や課題が生じ、その一つ一つを丁寧に解決しながら準備を進めてきました。

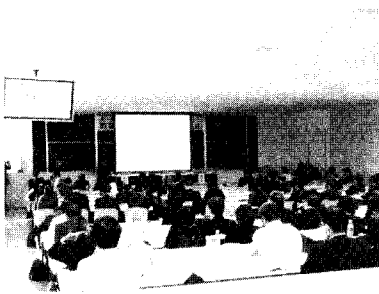
大会当日、栃木県が誇る、世界遺産の日光東照宮の厳かな表紙の大会要項を手にしてマイクの前に立った時、これまでの取組の成果を最大限に表現できたと、祈りにも似た願いが沸き起こりました。

何とんでも、大会は牛放送のドラマです。来賓の皆様や、アトラクション・記念講演の講師の方々が、気持ちよく話したり演奏したりできるように進めるのが私の責務です。

宇賀神実行委員長を中心に、総力をあげて大会運営に取り組んできた日々。宇都宮市の「おもてなしの心」とともに、参加された皆様にしっかり伝えることが出来たと実感いたしました。

〈会場責任者〉

鹿沼市立北押原小学校 江連昌宏



「会場全体に関わる一切のことについて判断し決定する。」これが、会場責任者の役割であり、その責任の重さに身の引き締まる思いでした。担当する会場が事務局のある教育会館から離れていた共和大学になり、各都県から100人を超える副校長・教頭先生が集まることになっていたために、予測できない事態が起きたら…と、当初は不安でした。

しかし、一昨年の12月には研究部や事務局の方が他の会場も含めて事前に視察し、施設の概要や使用方法等についての情報があったので、大変心強く、ありがたい思いでした。それをもとに、昨年の8月には会場の下見と大学の事務局の方と打合せ、11月には運営責任者や係の先生方と細部にわたる最終の打合せを行い、大会本番に備えることができました。

当初不安に思っていた今回の分科会でしたが、会場はプロジェクター等の施設設備が充実していたので、提言発表や研究協議が快適に行えました。そして何よりも、運営責任者や係の先生方が、前日の準備や当日の運営について、積極的、主体的に仕事を進めていただいたおかげで、有意義な分科会になりました。ご協力いただいた皆様、大変ありがとうございました。

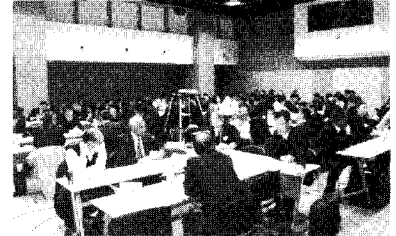
第1 A分科会「教育課程に関する課題」に参加して

芳賀町立芳賀南小学校 檜山 玲子

第1 A分科会では、2つの提案発表「校区小中学校が連携した教育活動の推進と教頭とのかかわり」と「新学習指導要領を踏まえた教育課程の実施」について協議しました。

私が参加した分科会Fグループは、1都7県から代表で参加した教頭先生方13人です。各地域の教育事情は様々で、都市部と地方部の認識の違いなどで教育界の流れを感じることができました。たいへん驚きましたが、新鮮でもありました。

提案1では、中1ギャップを解消するために、教頭は、各学校の実態を観察し、連絡調整・助言役が要であることや9年間のスパンで教育をする認識で、小中学校の先生方が理解し合えるように、お互いの良さを見いだすことができる研修や機会を設けることも大切であるという意見がでました。最近、地域の教職員による教育会の研修が簡略されている傾向ですので、校区の小中学校の教職員の交流の必要性の意見は大事にしていくべきだと思いました。

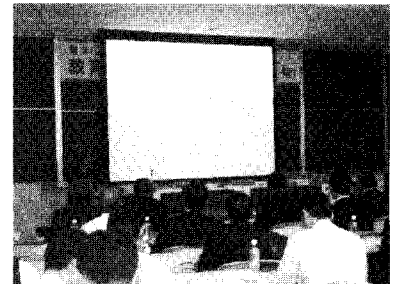


提案2では、教頭は、新指導要領の完全実施に向けてリーダーシップをとっていく必要性について意見がかわされました。分科会の討議は、今後参考になることばかりで、大変実りある研修でした。

第3(2)分科会「教育行財政に関する課題」に参加して

鹿沼市立菊沢東小学校 福田 玲子

第3(2)分科会は宇都宮共和大学で行われました。平成18年に設置された宇都宮シティーキャンパスはとてもきれいで、清潔感あふれる快適な空間で研修を行うことができました。午前中には2つの提言がありました。1つ日は、茨城県高萩市の提言で、「教育行政施策に基づく教育活動の活性化を目指して」という研究主題の基、園・校種間・地域との連携による「萩っ子」の育成についての発表がありました。研究の内容として、園・校種間の連携及び職員の交流促進や各ユニットによる特色ある取組、教頭としての行政とのかかわりなど、市を挙げての熱意あふれる取組が紹介され、大変勉強になりました。2つ日は、本県上都賀地区の提言で、「学校評価を生かした地域や行政との連携」ということで、学校評価への教頭としてのかかわりや学校評価を生かした提案書・記録書の活用事例、地域や行政との連携事例等について発表がありました。提言の後、他県の先生から全公教の研究推進に求められている「継続性・協働性・関与性」に焦点を当てた素晴らしい研究であるというお褒めの感想をいただき、自分自身も研究部の一員として一緒に研究を推進してきた甲斐があったとつくづく思いました。午後はグループ協議があり、他県の先生方と協議の柱に沿って意見交換が行われました。他県の取組について情報を得ることができ、参考になる点が多く大変充実した時間となりました。最後に、温かく丁寧な指導助言をいただき分科会は終了しましたが、提言内容・当日の運営両面において合格点をいただける分科会になったと思っています。



足利市立山辺中学校 菊地 廣光

大会2日目の分科会では、2つの研究が発表され、参加者等は、127名で盛況でした。

始めに茨城県高萩市立秋山小学校原浩教頭先生より「教育行政施策に基づく教育活動の活性化を目指して」のテーマで保育園・幼稚園・小学校・中学校の連携による「萩っ子」の育成でした。保護者と地域（特に高齢者）が連携に加わり、ユニット5として取り組みを実践していました。「いきいき萩っ子育成事業」と「生涯現役社会創出プロジェクト事業」委託を活用し、行政と連携し実践しています。

次に、栃木県鹿沼市立上粕尾小学校横瀬揚一教頭先生より「生きる力をはぐくむための豊かな学校づくり」のテーマで、学校評価に対する教頭の関与性について地域・行政との連携の視点で発表がありました。学校評価を保護者や地域住民に積極的に働きかけ、学校経営の参加促進を図り、行政機関への働きかけの糸口にしました。その結果、行政による予算説明会の開催や改善等が可能になり、ネットワークによる事務の効率化もできました。行政との連携と協力関係が強化されました。

また、各グループ協議では、具体的な情報交換ができ、活発な交流ができました。このような有意義な大会に参加させていただいたことに感謝申し上げます。

特色ある学校

「学校支援ボランティア」3年目を迎えて

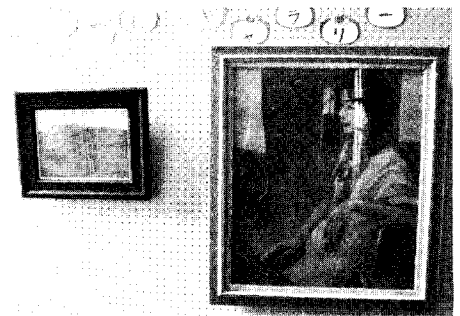
那須烏山市立江川小学校 坂本 勉

校庭南側の学校農園では、地域の高齢者の方々と低学年の子どもたちが楽しそうにサツマ苗の植え付けをしている。校舎内では、雑巾掛けをしている子どもたちに混じって、保護者の方々が高窓を拭いている。教室の子どもたちの机には「さりげなく学校の様子を見てみませんか。」というキャッチフレーズの保護者向けチラシがのっている。これは、私の学校で最近見られる生活の一コマである。

本校は、平成20年度から「学校支援ボランティア協力校」の指定を受けて3年目を迎える。具体的には、ミシン教材などの手伝いをしていただく学習ボランティア、花壇や樹木の手入れをお願いしている環境整備ボランティア、書架の整理や貸し出しをしていただく図書ボランティア、放課後の部活ボランティア、絵画掲示など、活動は多岐にわたっている。

暗中模索の中スタートした活動も、市生涯学習課のコーディネーターを中心に少しずつ円滑な運営ができるようになってきた。今の学校には、少し手助けしていただくだけで、随分助かることがたくさんある。「ちょっと、手伝ってほしいのですが」といった程度のスタンスでお願いできるように、やり取りを簡素化して取り組めるようにすることが、継続の大切なポイントであることを学んだ。

この指定事業も残すところ、あと三か月。今までに積み上げたノウハウをなんとか継続できないか、江川ギャラリーに展示していただいたすてきな絵画を眺めながら思案中である。



地域を誇りに思う子を育てる

那須町立朝日小学校 相馬 裕子

福島県西郷村まで15キロ、国道4号線沿いに、朝日小学校の白い看板を見かけた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。雑木林に囲まれ、遠くに那須連山の朝日岳を望む静かな場所。千振地区と逃室地区、夕狩地区の3つの地域の小学校が統合して生まれた学校です。来年は40周年を迎えます。

千振地区は、戦後満州の千振から引き上げた方たちが開拓した土地、逃室地区は無土器時代の遺跡が残る歴史ある地域、夕狩地区には、日光市の五十里ダムができる時、ダムの底に村が沈んでしまった方たちが移り住んだ場所があります。最近では東京方面から来た方の家も建ち始めました。暮らしている方々の土地に対する深く熱い思いが感じられる毎日です。共通するのは学校への大きな期待と協力を惜しまない誠実な姿勢です。

3地区の長寿会・社会福祉協議会の皆様にお世話になりながら、田植え、稲刈り、もちつきを行っています。春には、田植え歌を聞きながら苗を植えました。夏には汗まみれになりながら草取りに励みました。秋には稲刈り、もちつき。地域のお年寄りが大勢手伝いに来てくださり、もちつき歌を歌ってくださる方もいました。多くの人に見守られていることを実感しながら学校生活を送っています。

また、千振地区の開拓の歴史を総合的な学習の時間に学んでいます。開拓に入った方が、児童の祖父や曾祖父にあたり、苦しかった満州からの引き上げ体験、開墾の苦勞を児童に語ってくれます。

朝日小を支える地域の皆様とのふれ合いを通して自分たちへの期待と愛情を肌で感じつつ、その生き方から学ぶ児童を育てることが目標です。冬は雪と氷に包まれて…、と思う方も多いことでしょう。確かに寒い。でも、朝日小学校も朝日小学区もほっこりと温かなところです。

第八期研究まとめの年

宇都宮市・上三川町小学校副校長会会長 田 崎 和 男

宇都宮市・上三川町小学校副校長会は、宇都宮市・上三川町の副校長・教頭会77名（宇都宮市70名、上三川町7名）で組織されています。

本会では、全国公立学校教頭会統一研究主題「生きる力をはぐくむ 豊かな学校めざして」を本会の研究主題として、6研究課題について班を構成して平成20年度から研究を推進しており、本年度は3か年継続研究の3年次に当たります。（教育課程に関する課題1班、子どもの発達に関する課題3班、教育環境整備に関する課題1班、組織・運営に関する課題1班、教職員の専門性に関する課題1班、副校長・教頭の職務に関する課題1班）各班では、研究課題を受けて、それぞれ主題・副主題を設定し、これまでの研究を基礎として、副校長（教頭）として「いつ」「だれに」「どのようにかかわってきたのか」、さらに「結果はどうなったのか」「どう改善されたのか」等について、各学校の実践を通して副校長（教頭）の働きかけ（機能）の在り方をより具体的にしていくことを研究の柱として、継続性・協働性・関与性に焦点を当てた実践的研究を進めています。特に本年度は3年次にあたるため、副校長（教頭）のかかわり方に焦点を当て具体的な提言ができるようにしています。また、本会の研究体制を生かし、各会員がそれぞれの課題を持って学校現場で実践し、協働性のある研究になるよう努めています。

11月の関プロ栃木大会では、本会から2つ班の提言発表がありました。（「豊かな心と体の成長をめざして－食育の推進をとおして－」「学校経営充実のための組織マネジメントへのかかわり－うつのみや学校マネジメントシステムと教職員評価制度を関連させた効果的運用のあり方－」）また、1月には、各班の研究をまとめた研究収録が出来上がり、2月には、本会の全体研修会があり、4つの班の提言が発表され、各分科会で研究討議されます。

教職員の資質向上をめざして

芳賀地区小中学校教頭会長 塩 沢 清

芳賀地区教頭会は、真岡市・益子町・茂木町・市貝町・芳賀町の1市4町の教頭51名（小学校34名・中学校17名）で組織され、「会員相互の研修を行い、学校教育の振興を図る」ことを目的とし、会の充実・発展を目指して活動しています。

本教頭会では、県からの「副校長・教頭の職務」に関する課題を受け、一昨年度より研究主題を「教職員の資質向上をめざした教頭の役割」とし、年次計画の下に研究を推進してきました。最終年次の今年度は、副主題を「教職員の資質向上にかかわる成果と課題」とし、アンケート調査の結果や昨年度までの成果と課題を踏まえ、「校内研修の充実」と「人材育成」に焦点をあて、全会員の見識と熱意・創意を結集させ小中合同で課題解明に取り組み、11月11日・12日に開催された関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会栃木大会において発表しました。

また、教頭会として全体研修を年2回実施しています。第1回目は4月の総会後に行い、講師を芳賀郡市小中学校長会長にお願いしました。「学校経営者としての教頭の姿」と題しての講話でしたが、話の根底に校長先生ご自身の温かい人柄がにじみ出ていて、たいへん魅力的な話でした。教頭のあるべき姿や目指す方向性についても、多くの示唆をいただきました。

第2回目の夏季研修会では、1市4町を順番に訪れ、各市町の歴史や文化・産業等について視察を行っています。今年は、焼き物の町として知られる益子町の陶芸メッセと佐久間藤太郎記念棟の見学を通し見聞を広めるとともに、会員相互の親睦も深まり有意義な研修となりました。

今後も、会員一人一人が教頭の職務をしっかりと見極め、教職員の資質の向上と学校の活性化を目指し教頭としてのリーダーシップが発揮できるよう、研修の充実を図っていきたいと思います。

ひ ろ ば

海外旅行、あれこれ

高根沢町立北小学校 滝 律 子

最初の海外はあまり感動がなかった。

二回日はヨーロッパ十二日間の旅。御巢鷹山に日航のジャンボ機が落ちた前日だった。

「日本で大きな飛行機事故があった」と現地添乗員から聞いたのは初日のボンベイ観光を終えたバスの中。「四人だけ助かった」という話に四人で旅行していた私たちは「しぶといから生き残るね、私たち」などと笑いあったことを覚えている。しかし、無事着陸した時、機内中から拍手が沸いた。

それから二十年、暇を見つけては海外に出た。一番の思い出はキリマンジャロ登山。何度も国内の山で練習を重ねての挑戦だった。途中、ジャングル、草原、砂漠、雪原と変化する景色は夏、春、冬という季節を一気に体験できる。南十字星が肩ぐらいの高さに見えた。苦しい中やっとの思いで頂上に到着、知らずに涙が流れたこと。氷河が朝日で輝いていた。

飛行機が悪天候で飛べずに空港で一日中待たされたこともある。ダブルブッキングで帰途の飛行機に乗れず、送別会の主役だけが帰国。残された私は、もう一日観光できたことなど。

どこに行っても感じたことは同じ。それぞれが素晴らしく人間の営みがあること。それでも私は日本が一番。

ここ五年、海外に出る機会はない。ゆったりと豪華客船に乗り世界一周をすること。それが私の夢である。

花自慢の冬

栃木市立大宮南小学校 五味 寿 明

我が家の庭の片隅にある小さな温室の中が花盛りになりました。咲いているのはカトレア、コチョウランなどの洋蘭です。十五年にわたる紆余曲折を経て、ようやく栽培しているひととおりの株に花をつけることができるようになりました。

洋蘭と言っても、その種類は星の数ほどあり、性質も様々。栽培のポイントは、異なる個々の株一株一株の性質を知り、個に応じた栽培ができるかどうかだと考えています。水やり、日照、温度

など、好みの違いにいかに応じるか、小さな温室で、タイプの違う洋蘭をまとめて面倒みるのはとても難し



いことなのですが…。教室と同じで、いかに個に応じるかを日々考えております。

植物栽培で成否を分けるのは、「飾り物」と見るか、「生き物」と見るかという見方の違い。「生き物」として個に応じることこそをモットーとして、今後、洋蘭栽培のグレードアップを目指していきたいと思っています。

研修を通しての「同僚性」

小山市立豊田中学校 池 澤 満

今年度、下都賀B地区教頭会の庶務を経験したことで、色々なことを学ぶことができました。特に2学期には、地区研究発表会や関ブロ教頭会研究大会と大きな行事が続きました。それらの運営や司会にも関わることができました。そこで、ふと感じたことがあります。

私たち教頭職は、大規模校でもない限り、そのほとんどが各校一人で仕事をしています。時には、どう対応したらいいのか判断に迷うことがよくあるものです。校長に意見を聞けば、それで済むのかもしれませんが、その前に、同じ教頭の立場で他の先生方ならばどう判断するのか知りたいものです。同じ学校に勤務していれば、すぐに聞けるのですが、なかなかそうはいきません。

今回、私たち小山市教頭会中学校部会は、地区や関ブロでの研究発表を担当し、自主的研修も含めて何度も何度も顔を合わせ、意見を交換してきました。もちろん、今までもお互いに顔見知りではありましたが、研修を通して同じ仲間意識が芽生えてきたことを、誰もが感じるようになりました。いわゆる「同僚性」が高まったのです。同僚性というと、同じ職場でのものかと思いましたが、同じ志や思いを持つ者同士が味あえるものであることを実感した次第です。

編集後記

学校の仕事に追われ、気が付けば平成22年度も終わりに近づいています。

関ブロ大会のことはだいぶ前のことと感じていましたが、会報32号の「関ブロ大会」の特集を組むにあたって、寄せていただいた原稿を読んでいくうちに、いろいろなことが思い出されました。

発表に向けて何度も原稿を修正したり、本番さながらのシュミレーションをしたりして、パワーポイントを確認したこと。狭い会場にいかにか気持ちよく動いていただく工夫したこと。そして、第1日目の当日、会場のイチョウの葉全部が黄色に染まるのを見て、「きっと成功する」と感情が高ぶったこと。改めてお忙しい中、寄稿にご協力いただきました皆様に感謝いたします。(津浦)